

# 京鹿子

平成三十一年三月一日発行  
通巻一三五号(毎月一回一日発行)



3月号

鈴 鹿 呂 仁  
拾 掬 集 その四十二

あ ら た ま の 風 の 尖 り を 梳 る  
去 年 の 貌 今 年 の 顔 へ 裏 返 す  
恵 方 へ と 馬 手 と 弓 手 に 杖 二 本  
凍 つ る 夜 や 己 が 身 ぬ ち の 棘 晒 す  
待 春 の 河 馬 の 口 よ り 陽 の こ ぼ る  
二 ン 月 の 風 と 束 ね る 領 収 証



寒 晴 の 平 安 の 塔 峙 て り  
煩 悩 の 泡 は 浮 か ず 寒 の 鯉  
寒 の 翳 搔 き 寄 せ 眠 る 西 寺 趾  
芽 立 ち 待 つ 都 の 梅 や 風 の 黙  
笹 鳴 や 下 枝 移 り の 繁 の 濃 し  
白 鳥 引 く 羽 根 い ち ま い の 光 ゲ お い て  
呱呱 を 抱 く 里 曲 の 芽 ぐ み 鳥 帰 る  
を ち こ ち の 囀 り の そ ら 花 色 に

—  
近 詠  
—

和田 照海

浜千鳥

退 屈 な 渚 千 鳥 の 遊 び 啼 き

一 潮 に 終 る 焚 舟 夕 千 鳥

浪 か は す 羽 し ろ が ね の 浜 千 鳥

啼 く 千 鳥 声 は そ ろ は ず 沖 荒 る る

引 き 波 の 耀 ふ 渚 夕 千 鳥



松本 鷹根



寒の紅

裸木の参道影を労はれり

山茶花の散り放題に至誠あり

寒の施肥願ひ踏み締む寡黙の歩

産土の杜黎明の寒茜

行き交はす巫女の会釈や寒の紅

## 近 詠

塩貝 朱千

恋ごころ

都鳥京より遠き浮舟碑

恋ごころ宙へ抛ればしぐれ虹

冬雲疾しメタセコイアに終の色

室咲きの蘭を愛で来てドライカレ―

山眠り数へ切れない群鶴図

# 英華採集

病む窓の寒林にきく母の声

福 山 藤 井 杏 愛

充たされない日々の病院ぐらしを送っている作者にとつて窓外の寒々とした様は、追い打ちをかけるかのような景となつてゐるに違いない。しかし、今の作者にはその窓が唯一の楽しみでもある。病窓から見える枝葉を削ぎ落とした寒林に我が身の現状とを重ね合わせるとぼつかり空いた心の空洞の音が聞こえてくる。その音に混じつて聞きなれた声を感じたのであろうか？ 紛れもなく母の羊水の中にいた時に聴いたものと同じであるから聞き逃すことはない。母から子への励ましの声である。

数へ日やお買得てふ嘘を買ふ

京 都 岡 本 一 路

数え日ともなると大方の大掃除も終わり年用意も片付いてゐるのではないか。これからは、新年のお節の用意とか身につける新しい服とかの買い出しであらう、年末のデパートは、大賑わいで歳末セールもあちこちで見られ、それぞれに工夫を凝らしながらの歳末商戦が繰り広げられる。買手にとつての殺し文句は、「お買得」の文字であり耳触りよき言葉である。勿論、全部が出まかせの言葉ではないが下五の「嘘を買ふ」に妙に納得させられる。

はづれたる空の鉦や熟柿落つ

荒 尾 西 村 安 子

柿を頂くことがあるが夫々の我が家に成つた柿であろうから当然熟す前に採取されたものだ。地面に落ちてゐる柿を見かけるのは、鳥が取り落したものだらうか？ 自然による外的要因がなければ、柿は熟す前に落ちない筈であり熟柿が落ちてゐる様を見て掲句の「はづれたる空の鉦」と形容した措辞は言い得て妙である。何気ない普段の生活にある一駒に心が動かされるのが俳句である。この感性に磨きがかかれば俳句の方から寄り添つてくれることだらう。

# 神麓集

寒 茜 藤岡紫水

初山河ましてや比叡の男振り  
追羽根の軽さに風の素通りす  
年迎ふ一日一生こころとし  
竹百幹風をしぼりて寒に入る  
遠嶺ほど深きむらさき寒茜

花の塵 沼田巴字

誰もぬぬ山道怖し花こぶし  
初花やどこまで続くわが命  
ちりちりと乾く牡丹の三日かな  
死は常に身近かにありぬ散るさくら  
花の塵踏んで浄土にゐる如し

生姜湯 丸井巴水

聖樹の灯ともらぬ一つばかり見て  
母親へ泣く児を返すクリスマス  
神の手の医師より近き生姜湯  
水浅く海鼠ふて寝の錦混み  
簪のそよ揺れ除夜の鐘三つ

改元 植村蘇星

如何せむ一日足らむ年の暮  
歳旦や白らむ東天仰ぎけり  
平成を紡ぐ改元初日の出  
立つ木見る親を見る如初日の出  
大八洲天の恵や布団干す

# 神麓集

鬼は外 北川孝子

寒明けてだれ待つとなき日暮くる  
ふきのたう灰と明るき雲の奥  
ひとり居た笑ひの届く宴の明け  
なほ生くる齡愛しくて鬼は外  
寒明けてまむかへば湧く底ぢから

小六月 直江裕子

水澄める石放れども放れども  
秋風の機微わがものにして老いる  
起き抜けの冬すっぴんにぞっとする  
秋風を着ても脱いでもひとりかな  
小六月ずーっと長く居たい場所

雪 雫 高木晶子

家族の輪つかず離れず初詣  
初湯出て明日を思ふ肌の艶  
水仙の叢より歩巾広くなり  
平成の次々こぼれ雪雫  
年明けの車南へ疾走す

平成了ふ 伊藤希眸

冬のとんぼ庭に来てゐる地震くるか  
枯葉ひろふ猶生きたしと音をたて  
爪のびる日短かの陽に漬かりゐる  
歳晩や昔を探し土を掻く  
雪を被て威儀の富士晴れ平成了ふ

# 神麓集

猫の恋 奥田筆子

暗箱を踏み外したり恋の猫  
恋猫をめくれば湿ってゐる部分  
猫のつま暗い情熱冷凍す  
いま遠く爆発の星恋の猫  
煉炭の青い香のして猫と母

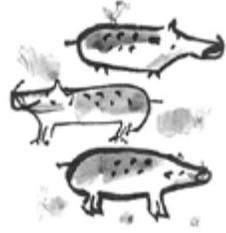
冬夕焼 井上菜摘子

わたくしを再演すれば雪がふる  
なりゆきに鍵持たさるる神無月  
まないたは殺生の板神無月  
冬の蝶見つけてもらふための笛  
野球バッグから皺くちやの冬夕焼

夢やゆめ 村田あを衣

美容師の鏡の奥の十二月  
再会の便りは草書今朝の秋  
淑気満つ御所の九門は翳正す  
夢やゆめ髪切つて来る雪女  
初蝶追ふわが本籍の風の中





# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

河豚鍋や舟足絶えぬ夜の海峡

短日の吐息も落とす砂時計

生き方を仕切り直して日記買ふ

小春蝶己の重さ忘れをり

娑羅もみぢ降る人生の曲がり角

花野より妣の花野へ発信す

泣く準備出来て枯葉の舞台かな

九条を語る二人に降るもみぢ

木の葉一枚拾ひ日常に戻る

山眠る片目達磨の置き去りに

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

小春日や平癒祈願の守り札

愁ひはた築地に消ゆる雪蛸

桜紅葉ひとひらふいの風訣れ

**ナポレオンの辞書さがしぬる冬茜**

気負ひなき歩幅マフラー巻き直す

蓮の実のとびてまあるき目が笑ふ

冬満月むかしむかしは通ひ婚

短日や波のいらだつ宇治の川

牡蠣剥くや切なさのどへ流し込む

葉牡丹に明日といふ字が確とあり

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

日に乾き月に濡れたる桐一葉  
福 山 亀井 福恵

雁わたる大和恋しとこゑ降らし  
木の実落つ森の礎となるために  
水茎の著けき碑文菊佳節

句碑成りて十方の秋澄みにけり  
紅葉散るこの世の朱さ奪ひつつ

冬の虹心の渦がうづきだす

日記買ふ胸裡さらける友なりし  
望郷の山河の音や鱗雲

裸木の明日へ生む音こつんこん

節くれの幹のロマンや冬景色  
風尖り木の葉しぐれの黙誘ふ

土寄せて冬菜を立たす反抗期

鱸酒やこの世あの世のはざまの世

聞き役は七分のゆとり枯尾花

冬の蝶紙の音して星へ発つ

薄ら陽へ託す命や冬の蝶

除夜の鐘捨てる女のしみと皴

年越しの眼球といふ水溜り

歳晩や老いる都会の天使たち

福知山 西村 滋子

京 都 菊池 和子

高 槻 安田 優歌

病む窓の寒林にきく母の声

缶蹴りの終はりにはしる木の葉雨

咬みしめる文の甘さよ小夜時雨

冬ざれやをりをりしみる手術あと

数へ日やお買得てふ嘘を買ふ

数へ日や逢ひたき人に逢へぬまま

言問の団子ひと皿都鳥

光陰を矢にはたとへず木の葉髪

はづれたる空の釦や熟柿落つ

黄落や夕日に染まる潮溜り

すれ違ふフェリーの見ゆる秋の湾

鬼の子の顔を出したる日和かな

ひたすらにメサイアを聴く冬至かな

妻に打つ感謝の五文字懐手

アラスカの鮭を茶漬けに故郷くに思ふ

平成果ついつもどつしり冬の山

福 山 藤井 杏愛

京 都 岡本 一路

荒 尾 西村 安子

アリソナ 伊吹 之博

